

と直接的にリンクした現在にあっては、この市場がまだ安定していない。だからこそ、中道派の役割がより重要になるのだ。

その例として、グローバル・ジハード主義者の台頭に対抗するように、知のイスラーム化や宗教対話、イスラーム経済などのオルタナティブを提示する中道派の動きを紹介した議論は、とりわけ興味深い。なかでも、知のイスラーム化をめぐる議論では、医療の目覚ましい発展によって、イスラーム法が臓器移植や脳死といった問題にかなり柔軟かつ迅速に対応できるようになったことが指摘されている。すぐれて現代的な問題に対する穏健なイスラーム的解釈が、人口に膾炙するようになったというわけだ。さらに、イスラームのウンマ内の学派、教派、学派の共存を目指すアンマン・メッセージ(2004年11月)の事例も興味深い。

また「対テロ戦争」で米国が力を衰退させた結果、イスラーム世界をめぐる政治が大きな影響を受けるという指摘や、政治の劣化を招いたムスリー政権の追い落としと同胞団のテロ組織化に警鐘を鳴らし、民主化こそが不義に怒る青年を減らして過激派の退場と穏健派の拡大の素地を作るという議論にも、首肯することができる。イスラーム政治の活力が、青年層の拡大という人口問題に起因する側面もあるのだから(第1章)、民主化によって穏健派の拡大の素地を作るとは、これまで以上に重要な論点になるだろう。

以上のように、本書は、これまでの長い研究のうえに展開された9.11事件以降のイスラーム政治論である。その深遠な分析は、イスラーム世界の現状と今後を理解する手掛かりとなるだろう。

さて、いわばグローバル・ジハード主義の落とし子である「イスラーム国」が台頭し、イラク第二の都市を陥落させたのは、本書が書かれた直後のことであった。この事件は世界を震撼させ、9.11事件に類似するインパクトを持つと主張する者すらいる。その後、「カリフ宣言」がなされるなど、中東イスラーム政治をめぐる動きが急加速している。そのなかで、9.11事件以降に拡大したグローバル・ジハード主義者が、その後支持を失い、「アラブの春」で中道派に取って代わられたようにもみえた。だが、「アラブの春」の「失敗」を受けて、再び急進派が勢力を拡大しているようにもみえる。「思想の市場メカニズム」に照らして考えるなら、時間をかけて揺り戻しが来ることになるのかもしれない。

一方で、「イスラーム国」の台頭は、明らかにこれまでのグローバル・ジハード主義とは異なる要素を多分に含んでいる。こうした状況の変化を、イスラーム政治研究の泰斗はどのように分析するのだろうか。本書の続編を期待せずにはいられない。

評者には、また新たに待望の書ができたことになる。

(山尾 大 九州大学大学院比較社会文化研究院准教授)

三浦徹(編)『イスラームを学ぶ——史資料と検索法』(イスラームを知る 3) 山川出版社 2013年
125頁

本書は、シリーズ「イスラームを知る」としてイスラーム地域の基本事項や旬なトピック(ムスリム同胞団、イスラーム金融、ムスリムとキリスト教徒の共生など)を一般向けにわかりやすくまとめたブックレットの一つで、「イスラーム地域の諸事情について知りたい、学びたいという人のための道案内」として刊行された。こうした「イスラームの～を知る」といった入門書は今では珍

しいものではない。またイスラームを学ぶにあたっての手引書としても、研究動向や文献案内をまとめた「ハンドブック」が何冊も刊行されている。しかし「史資料へのアクセス」という切り口でイスラーム地域への接近を試みる本書は、シリーズ「イスラームを知る」のブックレットの中でも異色の存在であり、これまで刊行されてきた入門書、手引書にも類がない。基本的なトピックの解説や基本文献の紹介ではなく、「資料の探し方」を丁寧に紐解いた資料は実は本書が初めてだろう。インターネットで容易に情報を得られる時代になり、図書館の所蔵資料はもちろん、イスラーム地域の書店や図書館の情報もウェブサイトでかなり入手できるようになった。しかし、そうした情報にアクセスするためにも適切な検索方法が実は必要である。本書は、イスラーム地域について学ぶ人に、文献調査を始める前にぜひ手に取ってもらいたい1冊である。

本書の魅力は、「資料の探し方」に関する実践的な知識を伝えるという点以外にもある。資料検索の解説というと、無味乾燥な情報を並べたハウツー本のように思えるが、そうではない。本書では、著者たちが研究や仕事の過程で実際に行ってきた探索の事例に基づいて資料の探し方を解説しており、読者は著者とともにちょっとした資料探索の旅を歩むことになる。その旅の中で出会う様々な史資料、そこからイスラーム地域の人、知識、社会の生き活きとした姿が立ち現われてくる様子は、読み物としても面白いし、読者を魅了するに違いない。

本書の目次は以下の通りである（()内は各章の著者）。

- 第1章 イスラームとの出会い（三浦徹）
- 第2章 研究文献を探す、読む、使う（後藤敦子）
- 第3章 史料を探す、史料から学ぶ（徳原靖浩）
- 第4章 現地語資料の入手（柳谷あゆみ）

第1章は「イスラームとの出会い」という章のタイトルがあらわすように、日本がいかにイスラーム地域と出会い、そこに関する知識を形成し蓄積してきたかが紹介されている。著者は、日本がイスラームと直接出会った幕末・明治から第2次世界大戦終了までの日本の中東・イスラーム研究には3つのエポックがあり、そのエポックにより日本は立場を変えてきたとする。第1期は不平等条約の改正問題を契機に同じ東洋の被圧民族として東洋の立場から接近した時期、第2期は日露戦争の勝利によって西洋列強と同じ植民地統治の観点から中東諸国を韓国と同一視し、第3期では「大東亜共栄圏」構想の下で再び東洋の立場にたち、満州・中国・南洋のムスリム問題に関心をもったとする。

そうした中で日本におけるイスラーム地域の研究がいかに発展してきたのか。明治初期に不平等条約改正のためエジプトやトルコに派遣されイスラームに遭遇した人々が、明治末から大正にかけて、ヨーロッパのイスラーム研究に依拠しながらムハンマド伝やイスラームの概説書を記したのが、日本におけるイスラーム研究の始まりだという。昭和になるとアラビア語等の現地語の史資料を用いた研究がなされるようになり、やがてイスラーム地域を専門とする研究機関も設立され研究が活発化した。第2次世界大戦の敗戦はそれらの研究機関とその蔵書を雲散霧消させたが、現在では様々な大学に中東・イスラームを学ぶ学科やコースが設置され、研究者や学生も増加している。日本におけるイスラーム地域の学問分野としては、歴史が最も多く、次いで地域研究、国際関係の順だという。

最後に著者は、今後の研究の方向性として人文学と社会科学を接合するイスラーム地域研究を提唱する。それは、イスラーム地域をイスラームを要素としてもたない地域とも比較することによ

て、ある現象がイスラームに起因するものかどうかを検証するものだという。そしてそのための多種多彩で豊富な史資料とそれを用いた研究が蓄積されており、読者をこの「史資料と研究の大海」への航海へと誘って、本章を締めくくっている。

続く第2章では、図書館やインターネットを利用した研究文献の探し方、入手方法が実践的に解説されている。本章の最初では、予備知識として「イスラーム」や地域をさす用語の変遷(例:「回教」→「イスラム」→「イスラーム」)が述べられているが、どの時代に書かれた文献を探すかによって検索語が異なるという指摘は重要である。最近ではGoogle等での検索が容易になりすぎたためか、自分の思いついた単語をインターネットで検索して該当するものがないと資料がないと思いついてしまう人が多い。本章では、こうした検索に必要な基礎知識が丁寧に解説されており、イスラーム地域について学ぶ学生にはまず読んで欲しい1章である。

図書館での資料探索については、代表的なレファレンスブックと文献目録データベースが、その特徴とともに紹介されている。便利なツールだがなかなか利用者に使いこなしてもらえない「分類」や「件名」についても解説されており、図書館で働く評者としてはうれしい限りである。

最後に、ここで紹介された検索ツールを用いた日本とトルコの関係に関する資料探索の実践例が載せられている。戦前のトルコ事情の検索から日本初のムスリム山田寅次郎へと辿りつき、彼の著作の検索からエルトゥールル号事件が紐解かれるといった具合で、この実践例からは知識の宝庫へと誘ってくれる資料探しのおもしろさが伝わってくる。

まさにイスラーム地域に関する資料探索のイロハが満載の章であるが、「インターネットで利用できるデジタルデータは加速度的にふえているとはいえ、人類が長いあいだかけて蓄積したものからすれば、ごく一部でしかない。世の中にはインターネットでは調べられないことも存在するという認識は、つねに頭のすみのどこかにとどめておきたい。」という結びの一文は、心に刻んでおきたいものである。

第3章は、特に現地語で書かれた歴史史料の探し方が紹介されている。加えて、最初の啓示がどのようにくだされたのかに関する文献の記述の違いを例に、史料とはどのようなもので、ある歴史的事実がどんな史料に基づきどのようなプロセスを経て「事実」となるのが解説されている。

まず著者は、イスラームの書物の歴史やイスラーム初期の史料と学問の形成について述べ、膨大な史料にアクセスするために古代オリエント時代から目録が作成され、図書館では主題毎に蔵書が分類され保管されていたことを紹介している。そしてそうした営為なしでは、知識にはアクセスが不可能となることを指摘している。

現地語資料の検索については、検索で必要となるアラビア文字などの転写(図書館用語では翻字。現地語の文字をラテン文字化して表すこと)方式の解説から、コンピューター化がもたらした技術的な問題とその解決といった裏話的な事項も盛り込まれている。特に、研究者や学生になじみのある翻字規則と、図書館で用いているそれとが異なることは案外知られていないため、非常に重要な指摘である。

最後に、史料の原典である写本をデジタル化し提供するデジタル・ライブラリーについても紹介している。写本のデジタル化は、紛争や災害による資料の散逸を防ぎ、文化遺産である写本をインターネットなどを通じて広く提供することを可能とする。歴史史料については現代の著作物とは異なり公開に際して著作権の問題がないものが多数あり、今後デジタル・ライブラリーでの公開がますます進んでいくものと思われる。古い史料ほどアクセスが難しいという時代はもうすぐ終わるのかもしれない。

第4章は、現地語資料の入手から利用までの様々な方法が解説されている。運輸や通信の発達から現地語資料の入手は格段に容易になった。資料によっては、日本にしながらインターネット書店でクリック一つで入手することも可能な時代である。にもかかわらず、著者がいうように「現地語資料収集には面倒も苦心も絶えず」、「だからこそ入手の喜びも大きい」。本章では、12世紀末に書かれたアラビア語写本を追いつながら、具体的な資料の探索と入手の様々な方法が述べられている。

章の前半では、各国で開かれる国際ブックフェアや現地書店での資料の入手について解説されている。著者が指摘するように、アラビア語書籍については、インターネット書店では主に新刊の一部を入手できるのみで、中古本や絶版本はほとんど流通していない。そこで現地での資料購入が必要になるわけだが、書店の紹介の中では、経験豊かなアラブの書店主の仕事ぶり、広範な知識と高度な教養を身につけた彼らと客たちとの間で展開される知的交流も描かれており、その様子に読者は惹きつけられるに違いない。

章の後半では、もう一度12世紀末の写本に戻り、校訂とはいかなるもので校訂本がどのようにつくられるのか、また校訂本と写本それぞれの利点について解説されている。そして年を経て劣化していく写本の閲覧・複写に当たって、所蔵館へのアクセスについて調べる重要性や、どのような形(現物、複写資料、マイクロか、デジタルか)で閲覧できるのかの確認、またそれによって事前に準備すべきことは何かなどの情報が提供されている。

本章は、資料探しを通して、現地社会や人々の思考、交流の一端にいかにつれることができるのか、資料を探して書店や図書館で人と関わることでいかに現地社会の理解が深まるのか、その楽しさを苦勞とともに伝えてくれる。

以上のとおり、イスラーム地域に関する史資料探索のための実践的な知識を提供したという点において本書には類がなく、その意義は大きい。加えて史資料を通じて人々や社会が見えてくる様子を如実に描き出すことで、史資料探し、ひいては学問の魅力を伝えることに成功している。「道案内」であると同時に、「学ぶことの楽しさを伝え」という本書の目的は十二分に達成されたといえるだろう。

しかしながら課題がないわけではない。本書の事例や対象となる史資料が歴史研究の分野にかなり偏っている点だ。第1章で紹介されているように、日本における中東研究では教育機関数、関係者数はともに歴史分野が約3分の1を占め最大多数であり、歴史研究を中心とした解説は妥当であろう。しかし、地域研究や国際関係といった分野に従事する研究者も増加しており、こうした分野では歴史研究とは違った様々な資料やデータが必要となる。例えば、統計や法律のテキスト、また官報や開発計画書、予算書、世論調査の結果といった資料やデータが必要となることもある。近年ではこうした資料の多くはインターネット上で閲覧可能なものも多く、また紙媒体での出版はなされずむしろインターネット上で(場合によっては一定期間)しか入手できないものも増えてきている。こうした資料の探し方には、本書で紹介された知識とはまた違った情報が必要である。もちろん本書の内容は、どの時代のどんな分野の研究者にも必要な基礎知識であり、現代のイスラーム地域の政治・経済・社会を研究する者にとっても有益であることには間違いない。現代研究に必要な資料の探し方は、本書に望むのではなく、別冊で作成されるべきものかもしれない。